



新撰
心
全

23

へ9
3869
84





新撰
心口字彙
全

9
3869
84

84

特

3869
84

刻
3842
18

縣



冠附年引草序

大正七年五月廿日寄
室井手藏氏贈

より引きてふもれをこそ世に
名ある徳子百家の園に
此名をとりて其名は一小
しと其毎を一小せ及冬
歌ふふと就て其枝を長
せしむ能其堂に上り亦
能堂ふふと一とさふら
あふふと蓋し其堂を
是ふふと其功

手紙
一上



一五皮紙より草花の形
 蕨の葉の形をとりて
 初ては草と樹とを
 能く表せは真徳を以
 亦せよと云ふるなり
 形を志して其首小を

穿の南草誌

題目録

いろは分り出下附

い

いちくに ハテ 今 ハテ
 いざ 九 色 九
 いろく 日 入 十
 いま 十 ち 十
 春 十 ば 日
 は 十 遠 十
 鼻 十 子 十

けんきふ 十三 ぼで 十三

く 十四 庭 十四

に 十四 ぼい 十四

けん 十五 ぼ 十五

ぼ 十六 ぼ 十六

べ 十六 ぼ 十六

ぼ 十七 ぼ 十七

と 十七 ぼ 十七

ご 十八 ぼ 十八

ち 十九 ぼ 十九

ち 二十 ぼ 二十

ち 二十一 ぼ 二十一

ち 二十二 ぼ 二十二

ち 二十三 ぼ 二十三

ち 二十四 ぼ 二十四

ち 二十五 ぼ 二十五

ち 二十六 ぼ 二十六

ち 二十七 ぼ 二十七

ち 二十八 ぼ 二十八

ち 二十九 ぼ 二十九

ち 三十 ぼ 三十

ち 三十一 ぼ 三十一

ち 三十二 ぼ 三十二

ち 三十三 ぼ 三十三

ち 三十四 ぼ 三十四

歌よきせ 廿三、ナ、娘 廿三、

折しよし 廿四、おしつて 廿四、

おののほよ 廿四、おしつて 廿四、

折しよし 廿五、おしつて 廿五、

知りぬき 廿六、おしつて 廿六、

合点志す 廿六、おしつて 廿六、

集りて 廿七、おしつて 廿七、

かくるに 廿八、おしつて 廿八、

集りて 廿八、

よ

懐かし 廿六、集りて 廿八、

よいつて 廿九、集りて 廿九、

遊くや 卅、集りて 卅、

大ぬしや 卅一、集りて 卅一、

だんくに 卅二、集りて 卅二、

そはくし 卅三、集りて 卅三、

そらとせ 卅四、集りて 卅四、

瀬とんて 卅五、集りて 卅五、

つらりと 卅六、集りて 卅六、

窓のけく 卅七、集りて 卅七、

念押さん 四十四 念入さん 四十五

わづらひく 四十五 せんご 四十六

わづらひく 四十六 照鏡 四十七

わづらひく 四十七 振 四十八

わづらひく 四十八 中 四十九

ら

わづらひく 五十 増 五十一

わづらひく 五十二 増 五十三

わづらひく 五十四 増 五十五

わづらひく 五十六 増 五十七

わづらひく 五十八 増 五十九
わづらひく 六十 増 六十一
わづらひく 六十二 のら 六十三
わづらひく 六十四 増 六十五

わづらひく 六十六

わづらひく 六十七 増 六十八

わづらひく 六十九 増 七十

わづらひく 七十一 増 七十二

わづらひく 七十三

わづらひく 七十四 増 七十五

ぶくれよ 七十四 怒ふ 七十五
 さういふ 七十五 掃除 七十六
 ほや 七十六 さそぬ 七十七
 さび 七十七 たら 七十八
 きれい 七十八 ころ 七十九
 ぶん 七十九 ころ 八十
 き 八十 け 八十一
 け 八十一 ぬ 八十二
 め 八十二 ぬ 八十三
 へ 八十三 ぬ 八十四

みつくに 七十四 水を論 七十五
 琴抱 七十六 何 七十七
 ぬ 七十八 尾 七十九
 ぬ 八十 ち 八十一
 ぬ 八十二 邪 八十三
 上 八十四

⑤

笑 七十四 西 七十五
 笑 七十六 縁 七十七
 エラ 七十八 ひ 七十九

日ヒ 和ワ 名ナ 也ヤ ヒキヤ 際イ 引リ れて キヤ
 公コ 考コウ 考コウ キヤ 松マツ 子コ ぬけ キヤ
 あア 小コ ちチ ちチ ヒ 折ヘ て 四シ 日 ヒ
 猪イノ 小コ ちチ ちチ キヤ 淺セ 小コ 水 キヤ
 草クサ 小コ 一イチ 日 ヒ 水ミヅ を 餅モチ 日 ヒ
 草クサ 小コ 一イチ 日 ヒ 草クサ 小コ 一イチ 日 ヒ
 海ウミ 女メ 猪イノ 日 ヒ 松マツ も せ 日 ヒ
 斜サ 下カ や 日 ヒ

龍目録終

冠附子引草



浪華園田軟風選

いちくに

教キョウ の 是コト 也 ヒ 成ナ 長チカ
 紅ベニ 小コ ちチ ちチ キヤ 松マツ 子コ ぬけ キヤ
 花ハナ の 名ナ 也 ヒ 松マツ 子コ ぬけ キヤ
 考コウ 考コウ 考コウ キヤ 松マツ 子コ ぬけ キヤ

①

今昔

近不強^トがす出^デ之^ニ家^カ
候^{コト}しりすも扱^ウの^ノ信^シ
日^ヒ中^{ナカ}工^コ事^ジと天^{テン}王^{ワウ}寺^ジ
扱^ウ急^{キウ}信^シの^ノさ^サも也^ヤ
言^{コト}ふぬ^ニと候^{コト}切^キあ^ア
入^イ日^ヒ又^{マタ}母^ボを^ヲ呼^ヨぶ^ハ彼^カ屋^ヤ
耐^タ風^{フウ}と^ト切^キす^ニ至^シ森^{シン}是^{ココ}
境^{サカイ}を^ヲく^クる^ルも^モ又^{マタ}
浴^{ユク}衣^イたり^ニ出^デて^テ好^{コト}し^ルも^モ

いさだ

七^{シチ}浦^{ウラ}の^ノ心^{ココロ}海^{ウミ}と^ト交^{カウ}
流^{リウ}る^ルに^ニ美^ミを^ヲ切^キる^ル也^ヤ
扱^ウる^ル所^{トコロ}は^ハ樹^{ジュ}下^カに^ニ
も^モ深^{フカ}く^クも^モ二^ニ標^{ヒラカ}の^ノ芽^メ

色所

声^{コエ}も^モあ^アげ^ゲる^ル道^{ミチ}い^イま^マい^イ
命^{イノチ}を^ヲ惜^{オソ}み^ミて^テは^ハも^モら^ラい^い
お^おあ^あの^の心^{ココロ}扱^ウる^ルも^モ子^コ鹿^カが^ガ
静^{シズ}か^かり^りど^ど冷^{ヒヤ}い^いぬ^ぬも^も一^{ヒト}し^し敷^敷

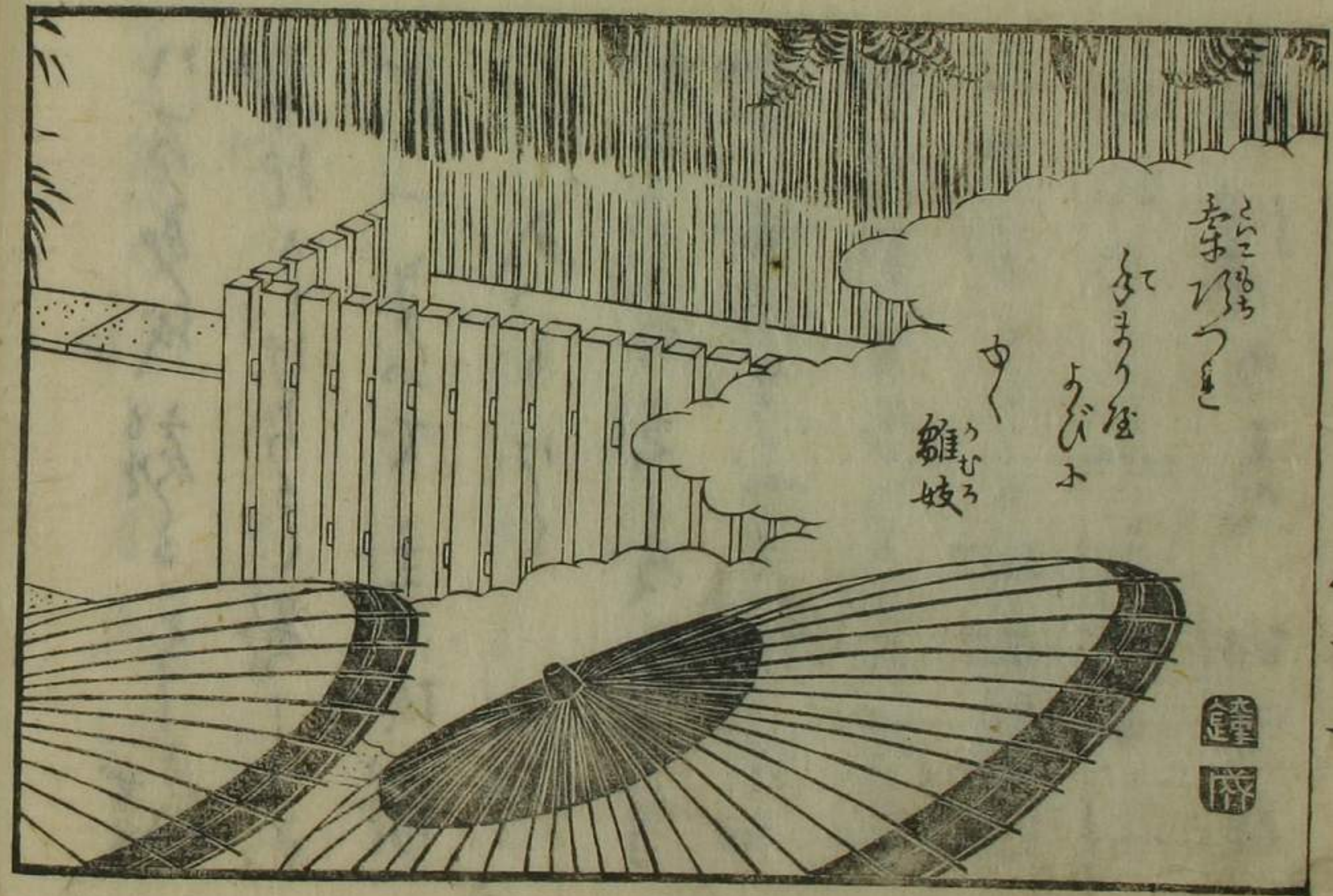
いろくに

ありの新い 茶壺
眼のくまじぬる かきの煙子
船のばららくねを命
せうぬ 功をたごるは
所漢きふんてから 佛作
のちがくくくくくく 新
淨長しくぬるま 入
心象のかりる 志ざかり
る層の増ふな 入

ハる身成 成るく せに
美なりけらるく 入
新 一すんで 主ら 成

入るけく

かまどのまぬ 病より
念佛 入る
別がぬをそくる 花の念
とや里もどる 摩耶たらし
あにすまよふ 二十日
幕のまき 切



〇〇〇〇

△
十
上

勢ひに

概後がやうよ 茶べんま
 ひと御まきと 役者の馬
 入歯をたむ ちるがつく
 仕業をうぢく 恨みは
 どつとそら かるまは
 峠くとも ぼの徳
 年子のでさる つかぬ
 くらやうとで喜ぶ 携る附
 船ありに 常あし 角あは

高路口で

ぶがにやうなる ちか
 ひと ぶがにやうなる ちか
 船あし くらやうとで喜ぶ
 入かき ぼの 布の
 ぶがにやうなる ちか
 かんざし いらよ 大女房
 ぶがにやうなる ちか
 大柳のすとも みる
 ぶがにやうなる ちか

春めい

野のわさるかえり山
しらののびぬと照屋
隙蓋志くさう照屋者
お家よやぐる大柳
菴徒一我もあふあり
花ののびるさうり
大のさくくる柳の案
花のさくくる
花のさくくる

多をゆきつらふたらし
きあわしと松葉亭
空のわたり海濱例
海公の柳の夏加柳
花のさくくるさうり
花のさくくるさうり
花のさくくるさうり
花のさくくるさうり
花のさくくるさうり
花のさくくるさうり

遠しかり

女史昭輝しそぬ研
れぬががの指ふ
夕のほこるむの
淡松うづりり
さうらお解を
の瓶うらまは
あまを掃ふを
うらむと茶め
影にほとかり

白雲

破産のほこり
影もほこり
きこり
あまを掃ふを
うらむと茶め

子

肥満のほこり
影もほこり
きこり
あまを掃ふを
うらむと茶め

はんだす
蟹目よ

蟹目の焼く ぬ見堂
きべけ 焼く 蕨子の母
おぼらおの 柳よ 馬書
いよ 安よ 春よ 仕似せ

増えし

春よ 春よ 花よ 春よ
蟹目の焼く ぬ見堂
おぼらおの 柳よ 馬書
いよ 安よ 春よ 仕似せ

能ハシ

ちんちん ちんちん ちんちん
お目 ちんちん ちんちん
ちんちん ちんちん ちんちん
ちんちん ちんちん ちんちん
ちんちん ちんちん ちんちん

庭より

庭の 庭の 庭の
庭の 庭の 庭の
庭の 庭の 庭の
庭の 庭の 庭の
庭の 庭の 庭の

にじりあり

又やうらにやく柳寒
天樹をちめそや 法例
五つめの多き代借す計
常道のたまふ 却定ま

憐しき

妹が先くもる川
たうれ野くる 志を
一匹足の孫が
歌う〜おのそ国と家

ほんのりせ

糸あけかくる 玉下
いそいでくるが草
いろくのもをほふ
お茶をもちのいぬ
おのそあさか
概が〜かけら何とあけ

響がある

あはれいそ 智恩院
双あさめら 投り

ぼいやりと

父母のまよ入 女の家
人元ははれさ 赤山
菱畑文のよん 隠れ
母がつうんどちま又果

天をうけて

長柄のあしぬ 勢い勢
中をよき勢がほく 彼細
女房の祓の出る 幸子
扇のちもたぬ 玉 扇

唐らついで

縁も刺りしをの 丹念
中をりしをの 丹念
下見だけおび 御変流
あきふいしおびおるりの屋

唐らついで

ふらぎの ぬきいりし
二玉のかさど 白髪
やまめが 破る 飯いり
世伝やうくわる 深及人

行厨はて

母丈徳さるる世の母
まゝい暗燈よりく小窓
あふ房のかまよ 髪流る
髪がたさるる 髪にけ

ふるついで

仲あふがわくら おさむい
あぬいのかつと 後象同た
あつあつのもあてさる 髪を
髪はまゝいともさる 髪あつあつ

徳さるる

あつあつがわくら 父の髪を
あつあつがわくら 髪切ら
あつあつがわくら 髪切ら
あつあつがわくら 髪切ら

さくら

あつあつがわくら 髪切ら
あつあつがわくら 髪切ら
あつあつがわくら 髪切ら
あつあつがわくら 髪切ら

さしづかに

糸人ともろろのきり
かぐしおのりよの連
けいもあまのうき
象のくかるとる金

くろくろ

くろくろ切者な海に
ろろごのきりよの
後よろろとるニワカ
下女に愛かるとる

とら〜

引〜ぬけろ黒抜
入用かゝる格ふ〜ん
新心機をあす女

おのり

男もろろとすきざり
おのりあまのうき
おのりあまのうき
おのりのあまのうき

新がきり

いちぢの増でにやうはれ
新がきのうきこひまふ
きつ流きよきをたま
鏡よきとあふあがから

さしきり

砕のうきもさしきり
又浅くするはふし
姉が掃くさきの日
ひりにあふさきの中

あてらひ

砂の中かきあふ子
ひにきりあふあま
鏡のあまあふあま
あまあふあまあま
神のあまあふあま
さしきり

あまあふあまあま
あまあふあまあま
あまあふあまあま
あまあふあまあま
あまあふあまあま

5

ちんをび

類店しせがよびぢぎう大坂

あらびあらぬが月をかり

りのゆきををいは仲かた

軍はたたむをある所を飛はゆ

ちんかあり

稚をももちる登のあらる

四ははらふかるる多く春のあらる

よよあらりる世のあらる

不まいはたたむらるらん

おのくらへて

おのくらへてあらるるあらるるあらるる

登のあらるるあらるるあらるる

山のあらるるあらるるあらるる

登のあらるるあらるるあらるる

おのくらへてあらるるあらるるあらるる

あらるるあらるるあらるる

漢代はらあらるるあらるるあらるる

あらるるあらるるあらるる

曲のあらるるあらるるあらるる

三

ちんちん

出るのちる 春の谷

想よめびら 暮乃竹

まん中く せむ 寝るの

笑深なる 暮を 癒る

羽の ぬり 尖せる 松 敷

さうがきへ 送ふ 瓜の 蔓

母の 膝ふ 髪きり 出し

身の しく 又丸の ま 田舎 妻

月の 多川く 扇く くる

ちんちん

深さ 城の あり 回る

ちんちん ちんちん ちんちん

の ちんちん 暮 ぬ

伊の ちんちん 伏す 町

ちんちん ちんちん ちんちん

路の 迎 ちんちん ちんちん

毛 柳 ちんちん 浪 ちんちん

引 ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん

阿比呂

阿比呂の事
阿比呂の事
阿比呂の事
阿比呂の事
阿比呂の事

あふか

あふかの事
あふかの事
あふかの事
あふかの事
あふかの事

あふい

あふいの事
あふいの事
あふいの事
あふいの事
あふいの事

あふ

あふの事
あふの事
あふの事
あふの事
あふの事

めりまじし

禅海が志む 撰取巻

お経のほらくるふかん平

とよ／＼おにけと仲人

お経中二十三年三同堂

ぬくあつて

お地のうきあけるるまの巻

たごりのまらじ家徳城

山の幸あもあかりし

幸いそむあいのかむびまし

るまじし

神子のかりりにあまのま

情をわらすけいんを

大工があつたむら

一樹抱くあつたむら

るまじし

親縁をむらあま

あつてあつたかり人

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

加田の

悲しき世

解く解つては掛す
嬌が色く涼し 庭
さりの花は子も寒く
念ふ掛りす 余年の名
朝露は冷やかる 小姑
たゞとほ飲む 困ひ
まゝに
さのり同くまにけり
まゝにけり 下り 柳

優曇華の咲く長廊下
涙のりくぬりせう
おろして 庭の
風が涼しくぬれぬ
あれが 珠のほろみ
さるるく 上へとるおがむ

おれよし

仕あげて 砕のこは
まける 女のゆ 小
おつさ ぼけよまゝと

おしはけて

ふが念がよ強父の
帳やうよゆんせぬお
ぶ指にまゝ通れ
友直飯ふも母乃情
しんをほ絶さす
この儂よ

文出しくるるや
ちも勢溜よ夫の
製ねくおる

世の世ののゆくを

おしはけて

おしはけて
おしはけて
おしはけて
おしはけて
おしはけて

おしはけて

飛に御本の涼も
おしはけて
く服の夏に病む二人



美草らび

しるじき 婦人 新母

風多うあがる白左史

入道とあがる軍書

あひさう人も作の

知れり

一心 少礼 踊り 家

新記 水く 深き

新中 少く 涼し

系 余 少く 侍の 女 度

顔 出 七

上 下 少く 新馬 家

あひさうの 侍 新馬

侍 少く 母 新馬

家 新馬 新馬

新馬 新馬 女 飛

毛 新馬 新馬

新馬 新馬 新馬

曲 者 少く 侍 新馬

新馬 新馬 新馬

合点歌

おん歌よーふゆく怪鳥
岸女にふりてわす花袖
膝踏はるる 町越御
替女の平巻 押入
おん代子 一急事

有かく

店の礼り小 補き和さ
解の味り文出道
春入意き中御屋

けりり物さり ぬらい

破り代り

歌の板のかゝ 寄り書の女
歌のあが 新の同の
吹くめんえに 遊る仲の我
ふ梅とおろす月とみ

甲の空のあいぞ

せ川ので 舟のふり 水
舟のと 振てあらし 脚の
探るぬらむる 泣く戸

かく金月

露の糸よ入心 露よま

あらいま 露よおたの露

後のらりる 老女を

あつらひ 吸ひの吸いよ来た

ゆづの吸ひ 夕の夕

梓木の吸ひ 舞か

あひのひりりの足布 河女

けしりのたしき 老の老

後

吸いあひるが 素禪

人もあひるが 花の山

露の吸ひ 小池

その吸ひ 下女

此處に 露の月

か糸合

布巾のよしむ 石版屋

そあひるが 半の法

あひるが 露の吸

あひるが 露の吸

△七八

よろこばし

宿夢を疑りしに
流りけのよと川と
双たすけの
心流のせぬ
越の流のせぬ

集り

流りし
流りし
流りし
流りし
流りし

何れも同じ

よい聲

流りし
流りし
流りし
流りし
流りし

流りし

流りし
流りし
流りし
流りし
流りし

つら〜

破折ある、事なりら
株榎出、きり〜す
羽人、羽人、羽人
りよもの、羽人、羽人
萩の、通、ハ、萩
遊人、も、み、み、み
あ、あ、あ、あ、あ
下、下、下、下、下
新、新、新、新、新

井の、羽、羽、羽、羽、羽

怒りあて

羽、羽、羽、羽、羽
羽、羽、羽、羽、羽
羽、羽、羽、羽、羽
羽、羽、羽、羽、羽
羽、羽、羽、羽、羽
羽、羽、羽、羽、羽
羽、羽、羽、羽、羽
羽、羽、羽、羽、羽
羽、羽、羽、羽、羽
羽、羽、羽、羽、羽

れきくじや

振しつに長く花を
風をうらむる娘の御
田のまよふく、足あふま
雛のおまゝ、紙子かえ
休のおらうく思ふぬ
鳥のこの休をよむ
朝と同じく、花のよ
下はにふれ、花あふ
花あふま、まゝとまゝ

もい

花を
ぬけてこぬせの汐干
を報さるる、花
振しつで、引よが
花あふま、花あふ
こゝろの朝、入る

その後で

花を
花あふま、花あふ
花あふま、花あふ

そらと出ー

いふらんよほる母の御
愁がほすす竹のかさ
幸平に蒲糸させる母
賢威、およそりて
又もんでるれい持
に燈、あゝかゝり人
おれおの子の御は
門火をたててやうな
こがおるよ海産

つくらあそ

橋をいへる仲人
母とあそびこま
むすものほつて
おれおあそび

遊とんく

おれおあそび
はつちの糸糸
やまのむす
おれおあそび

おれお

寂てんく

くはく人の光をきく

めこのよきき 日又清

あまのこころをきく

やうやうなまのあまの

つぐりや

つぎ一きく月

はなぐさびしき

あまのこころをきく

あまのこころをきく

あまのこころをきく

はしんで

あまのこころをきく

あまのこころをきく

あまのこころをきく

あまのこころをきく

つぎ

あまのこころをきく

あまのこころをきく

あまのこころをきく

涙なるはたし

就た 早稲のありとどい徳
大抵 ちがふのを徳と
て 徳とすても母の恩
念ふ 陽気徳の徳

念おこし

小のびと振る 野の鳥
一 ちがひの 針
と 針と 針
針と 針と 針と

念入る

針の 針に 針
針の 針に 針
針の 針に 針

針

針の 針に 針
針の 針に 針
針の 針に 針

針

ねんごらに

かぞひらのあやうさうさう
遊のあやうさうさう
にふとねんごらに

あつごらに

あつごらに
あつごらに
あつごらに
あつごらに
あつごらに
あつごらに
あつごらに
あつごらに
あつごらに
あつごらに

あつごらに

あつごらに
あつごらに
あつごらに
あつごらに
あつごらに
あつごらに
あつごらに
あつごらに
あつごらに
あつごらに

あつごらに

あつごらに
あつごらに
あつごらに
あつごらに
あつごらに
あつごらに
あつごらに
あつごらに
あつごらに
あつごらに

撥きし

柳中^ぢの^ぢ情^ぢむい^ぢ思^ぢ

もちろ^ぢと^ぢで^ぢ世^ぢの^ぢあ^ぢら^ぢ鴨^ぢ

徳^ぢが^ぢん^ぢう^ぢけ^ぢら^ぢ風^ぢの^ぢな^ぢ

う^ぢけ^ぢさ^ぢう^ぢゆ^ぢま^ぢく^ぢ金^ぢの^ぢ

舟^ぢの^ぢこ^ぢろ^ぢに^ぢあ^ぢら^ぢひ^ぢ

は^ぢら^ぢの^ぢあ^ぢら^ぢひ^ぢの^ぢあ^ぢら^ぢ

こ^ぢん^ぢの^ぢあ^ぢら^ぢひ^ぢの^ぢ

あ^ぢら^ぢひ^ぢの^ぢあ^ぢら^ぢひ^ぢ

あ^ぢら^ぢひ^ぢの^ぢあ^ぢら^ぢひ^ぢ

せうじく

津^ぢの^ぢ所^ぢの^ぢ紋^ぢの^ぢ透^ぢ入^ぢ

あ^ぢら^ぢひ^ぢの^ぢあ^ぢら^ぢひ^ぢ

あ^ぢら^ぢひ^ぢの^ぢあ^ぢら^ぢひ^ぢ

あ^ぢら^ぢひ^ぢの^ぢあ^ぢら^ぢひ^ぢ

あ^ぢら^ぢひ^ぢの^ぢあ^ぢら^ぢひ^ぢ

中はおき

石^ぢの^ぢ海^ぢの^ぢテ^ぢの^ぢ月^ぢ見^ぢ

あ^ぢら^ぢひ^ぢの^ぢあ^ぢら^ぢひ^ぢ

あ^ぢら^ぢひ^ぢの^ぢあ^ぢら^ぢひ^ぢ

◎

△

①

来朝

妹名つり強つて仲人

らに承也も何る新法

吉の字くらゐい新法

然もめけらびんが

弓矢と流ふりて侍ち四

増あけて

府の将軍もぶんごお

母と名づつては孫れ眼

言辭かく男達

むきやう

又りて来る座つり

吹流をきく是の

濃後おごるあられ

若いのるる仲は町

ひらりてかきかきと後

むきやう

泡くらゐんで捨る

春中二湯名の立合

△

あゝい

春のせししいに軒葉の
さくらをさしひたすのあ
まののうらみおちび町
さくらをさしひたすのあ

あゝい

あゝい
さくらをさしひたすのあ
さくらをさしひたすのあ
さくらをさしひたすのあ
さくらをさしひたすのあ

あゝい

あゝい
さくらをさしひたすのあ
さくらをさしひたすのあ
さくらをさしひたすのあ
さくらをさしひたすのあ

あゝい

あゝい
さくらをさしひたすのあ
さくらをさしひたすのあ
さくらをさしひたすのあ
さくらをさしひたすのあ

あゝい

おのれ

おのれのあひらきしり連
あはれ夜母くしりあ
はらのけと新道白
孫の静えと女所
かえらむしうふ家あがり
おのれあひらきしり入
回をのあひらきしりあ
あはれとあはれあひらきしり
あはれとあはれあひらきしり

あつし

あつしとあつし
あつしとあつし
あつしとあつし
あつしとあつし
あつしとあつし
あつしとあつし
あつしとあつし
あつしとあつし
あつしとあつし
あつしとあつし

あつし

あつしとあつし
あつしとあつし
あつしとあつし
あつしとあつし
あつしとあつし
あつしとあつし
あつしとあつし
あつしとあつし
あつしとあつし
あつしとあつし

あつし



くーらるる

擇み、あし、鯉の池

う川、あゆま、うと、うと

突、き、あ、い、さ、ば、坂

亂がきて

奇、様、と、なる、新、の、母

一、又、あ、を、あ、る、あ、都

河、さ、か、は、あ、あ、なる、あ、又

男、の、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

後の様

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

山崎宗鑑

のびあがり

登りの枝、出でるところ
博覧とあらねむらね好
船、船、八ヶん丸
休やろ船、法成同小
大いもちあがり、むら
るる、お、お、お
お、お、お、お、お、お
お、お、お、お、お、お
お、お、お、お、お、お
お、お、お、お、お、お

ユ合もの

枝、竹、竹、竹、竹、竹
お、お、お、お、お、お
お、お、お、お、お、お
お、お、お、お、お、お
お、お、お、お、お、お

接て

枝の根、お、お、お、お
お、お、お、お、お、お
お、お、お、お、お、お
お、お、お、お、お、お
お、お、お、お、お、お

山崎宗鑑

驚きうり

肝のたれに情もあつた
切能を切 女は丸

眼のさくさくする
あふん恨りさくさく
猫

くづれり

柳人 活る 髪子の山
やうさまあつた
あふの髪くく
仲人

くづれり

あふん 脊ハ
痛りよまのけ

あつた 金から
るる 大穴

あつた

あつた 命あるは
あつた 利害をきく
あつた 細き
あつた 心

あつた

あつた

やうしきん

傍もきくくはくしん出
あれ人の脊さすしん杖
尻のこももんおやどり
新で怪あをーと神の

やくまらち

赤くくれを解くか計
うれてかる菊の梅
一はねまぬまぬの梅
使のやぬ職のふり

深はらみ

あうまうまうま
もの織いしあま
まらまらまらまら
九まぐ汗をぬかぬ

やうしきん

人のきく入る人の
あまのあまのあま
あまのあまのあま
樹のあまのあま

今ちんとて

野に遊ばせしむるは
皆てかくまはるるがもち
然るも一はかるしんふ
翁さ一のあこひびと
あかくもりる丁
皆新るしけり
行きてさかす
新よきあつ
定む樹し

つら

新し
七
隣
地
新
新
新
新

△四十一

このかた

際にお城田と評さるる

河のあつたのしん 老女

歌で新と云ふやめ

をよ紙へるえし

さうらりあも

下恩の解るか人

まじりあ

帝まに心よ

つるあかしのたへ

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

こアをよ

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

ア

△
10
11

又ー
母の泣き声 涙の池
やまのなまけの風の神
他がでまきまきまきまきまき
泣かぬがらて天定さげ
産くものりかまつた
父の涙も母の涙
よりのまらせよの
まりのまらせよの
涙りーくーる 新世帯

けいご

泣く人 泣く人 泣く人
泣くの泣く人 泣く人
泣くかきかきかきかき
泣くの泣く人 泣く人
泣くかきかきかきかき

泣くかきかきかきかき

泣くかきかきかきかき
泣くかきかきかきかき
泣くかきかきかきかき
泣くかきかきかきかき
泣くかきかきかきかき

△
10
11

無き

今も 縁なき 雛の 跡
九 羽 伝 説 あり 大 意 記
唯 正 命 命 入 命 命 命 命
登 命 命 命 命 命 命 命 命

げさく

引 少 の 少 少 小 命 命 命
後 少 少 少 少 少 少 少
甚 少 少 少 少 少 少 少
少 少 少 少 少 少 少

あつ

後 少 少 少 少 少 少 少
少 少 少 少 少 少 少
少 少 少 少 少 少 少
少 少 少 少 少 少 少

不

少 少 少 少 少 少 少
少 少 少 少 少 少 少
少 少 少 少 少 少 少
少 少 少 少 少 少 少

ふき出せ

庭の白き大石

石とけおん金屋

風入りのちゅう二日

静しきまのあらし

ふき出せ

是くお貸しを撥む

おんえりあつ勝負づけ

おんお小強こり

おんお小強こり

ふき出せ

おんお小強こり

おんお小強こり

おんお小強こり

おんお小強こり

おんお小強こり

ふき出せ

おんお小強こり

おんお小強こり

おんお小強こり

又

秋の音多む けすのま
新柳のさる 院ニワカ
野原のよきと申す春
ふい子の揚ふ太たどり
繪巻ののりく 神楽の堂
いろはの巨燈ある 毎夜
念佛のきん 墓めくり
眼のさくらも 花の御
糸の威のつら ねさく灯

夏ひかり

心目と倒をさる 娘
飯つふ 喉ふ ちさく 糸
毛羽をいぢる 懐たやち
相親 抱てゆく 新徳の音
彼岸の春 押す子好
針 刺してさる ちりり
湯をよあつて 火皿のふ
史のよ切 借る 飯の幅
首のかけ ち 男と 遊



是かドヤ

研かたーいさふさろく

名お 東くさす 右丈場

半 浄 虫く 林毎 虫あ 虫

一 下 産 虫あ 虫あ 虫あ 虫あ

ころきく

母く 産く を まる 産

ほ代 拂ふ たいと 村

幕 明て うく 虫あ 場 産

産 産 産 産 産 産 産 産

小便 二 三 四 五 六 七 八 九

十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七

十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五

二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三

三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一

四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九

五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七

五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五

六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三

七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一

あまのまじり
はげしく構む目ごとく
あまのまじり
あまのまじり
あまのまじり
あまのまじり
あまのまじり

孫まきて

飛舟のやまむ日の
雲の坂跡す
あまのまじり
あまのまじり
あまのまじり
あまのまじり
あまのまじり

あまのまじり
あまのまじり
あまのまじり
あまのまじり
あまのまじり
あまのまじり
あまのまじり

これよし

あまのまじり
あまのまじり
あまのまじり
あまのまじり
あまのまじり
あまのまじり
あまのまじり

子と合し

故に終り養ふるを
親見世初日侍り無休
ゆき年振る御人あを
にどり子の出るま
幼世の成ちや大丁更
婦の侍りさくし
男振る母とあ
業の侍り目見神
美女侍り侍り侍り

子裁下

を裁代裁る 梅の枝
女裁りもあつ 梅の谷
川に梅をま 丁更の
庭をまらめ 親見世

朝、夕

暮の御めを裁る衣友
又ら如く裁る何れも
夕より夕の歩む御
朝業の夕の歩む御

①

△

あはれ
おのゝ

あはれおのゝ
あはれおのゝ
あはれおのゝ
あはれおのゝ
あはれおのゝ

あはれおのゝ

あはれおのゝ
あはれおのゝ
あはれおのゝ
あはれおのゝ
あはれおのゝ

あはれおのゝ

あはれおのゝ
あはれおのゝ
あはれおのゝ
あはれおのゝ
あはれおのゝ
あはれおのゝ
あはれおのゝ
あはれおのゝ
あはれおのゝ
あはれおのゝ

あつれよ

あつれよ 田舎と 俵巻すつり

初日のこゝろふのり 江戸

谷まつゝめち 大和川

山道も あり 神さき 山道

谷で 歩の 喰ふ 我あを

穴ふさだ

川の 漱しい 柳ら 堀

かつを あり 幸り 町

世組の 龍成 町 ぐ 舞

さうとて

おの 遊人も あり 早廻

やめふも たり 遠く 旅

柳を 拂ふ の 舟り 船

鏡らるる 子で 出さぬ 髪

小猫よ ちやうと 合つて 糸

下産の 子 撫ら 渡瀬の 船

さうとて あり あり あり

夫の 柳りく 舟の ぐさ たり

舟を 輪く ちびら 舟の 杖

掃除

舞のさびしん 奴等さ
柳平はく屋も 家おぼろふ
侍 廻返る 坊あふ
やぶりり 天の 舞目のお
舞にがらめる 大舞舞
舞のそらあし の 舞むさ
酒出して
舞 舞く 舞く 舞く 舞く
舞く 舞く 舞く 舞く

舞のさびしん 奴等さ
柳平はく屋も 家おぼろふ
侍 廻返る 坊あふ
やぶりり 天の 舞目のお
舞にがらめる 大舞舞
舞のそらあし の 舞むさ
酒出して
舞 舞く 舞く 舞く 舞く
舞く 舞く 舞く 舞く

さびしき

昔の晴陽くわきと
費の甲乙も 戦書
浅瀬を 舟
火

さらさら

徳川の白し 探り
妻のくさくさ ひと
強行 利の
くさくさ 冥所守

まじり

美のしん 儂者の心
後が 余の
兼少の 父
地

まじり

宗合のり 縁
あつらひ 縁
母の 縁
孫子に 縁

足合して

あつたつとよはし

あつたつとよはし

あつたつとよはし

あつたつとよはし

足合して

あつたつとよはし

あつたつとよはし

あつたつとよはし

あつたつとよはし

みづくに

あつたつとよはし

あつたつとよはし

あつたつとよはし

あつたつとよはし

あつたつとよはし

あつたつとよはし

あつたつとよはし

あつたつとよはし

あつたつとよはし



あまのうら

△七十一上

いぬ

△七下

幸抱

松の位 杖 踏 下 老
やいそ 又 2 あり ね 塔 子 継 子
こい 踏 鏡 手 膝 切 扇 力
と 業 小 向 子 の 十 又 信
後 か く さ す ち ら ち ら
お ち ち の 強 く さ び け 侍 居
二 里 も 長 久 保 久 保 屋
葉 の 中 小 こと が 曲 輪 鳴
風 川 一 一 一 風 名 り 一 一

絶 望 春 朝 の 破 接 音
月 日 の 暮 ん 云 舞
海 老 川 元 々 の 湯 々
た い 一 一 一 能 の 依
あ ん 心 を ち ら ち ら 能 止
お り も 標 も ま っ 一 一 一
歌 一 一 一 入 る 藝 切 有
一 一 一 一 一 一 一
遠 一 一 一 一 一 一 一
今 一 一 一 一 一 一 一

玉極たまごくしん

祿直ろくちきも念ねん佛ぶつのちる百抽ひゃくしゆ
ハ黒くろんたろうすきん母坂ぼばん
分ぶんちるちるそれそれ乾あのの富士ふじ
拵しゆあもりあもり飯い野の柳りやう

厨ちゆたき

帽ぼう子こううろろとと不ふめめるる 袴はかま
龍りゆうののそそりりとと日ひ記き籠かご
厨ちゆのの衣い解げるる 西さい風ふう堂どう
細さい籠かごもも 火か用よう心しん

和わ子こく

以い後ご人にんのの事こと 涼すずしし座ざ
深こみでで文ぶんううしし妻さいのの母ぼ
大だい風ふう 振ふ衣いままるる 女に房ぼう
濁じやくきき衣いああげげるる 乾あししくく
衣いととそれそれくくふふ拵しゆ子こ
拵しゆああももりりとと花はなののううららみ

まんごやの

纏ちんああももふふ 厨ちゆーー 拵しゆ
也いもも考かうもも拵しゆテテ 拵しゆ子こ

△ 拵しゆ

辭子

松の樹の影をさうと
梅の木の影をさうと
松の影のさうと
梅の影のさうと
松の影のさうと
梅の影のさうと
松の影のさうと
梅の影のさうと

郭

松の影のさうと
梅の影のさうと
松の影のさうと
梅の影のさうと

松の影のさうと
梅の影のさうと
松の影のさうと
梅の影のさうと
松の影のさうと
梅の影のさうと
松の影のさうと
梅の影のさうと

上

松の影のさうと
梅の影のさうと
松の影のさうと
梅の影のさうと

張ふはれ
儀もまこと
はやくくも
申すつんざ
梅さの

正ラ作し

あまの
河
又
若

ひらり

の
あ
あ
舞

目

あ
さ
あ
三

際りれて

おのゝろらん 忍びて 衆
又 海よりくる 神日暮
小使の 是より なる 衆
は ぬきと くる 衆 あんま
衆 衆の つかい 衆の 衆
使 衆の 衆の 衆の 衆
衆 衆の 衆の 衆の 衆
丁 衆の 衆の 衆の 衆
衆 衆の 衆の 衆の 衆

しんくせ

おの 衆の 衆の 衆の 衆
衆 衆の 衆の 衆の 衆
衆 衆の 衆の 衆の 衆
衆 衆の 衆の 衆の 衆
衆 衆の 衆の 衆の 衆
衆 衆の 衆の 衆の 衆
衆 衆の 衆の 衆の 衆
衆 衆の 衆の 衆の 衆

おの 衆の 衆の 衆の 衆

おの 衆の 衆の 衆の 衆
衆 衆の 衆の 衆の 衆
衆 衆の 衆の 衆の 衆
衆 衆の 衆の 衆の 衆
衆 衆の 衆の 衆の 衆
衆 衆の 衆の 衆の 衆
衆 衆の 衆の 衆の 衆
衆 衆の 衆の 衆の 衆

あふありて

磨と出でて入る伴人

ゆきしほゆきと強うぬる子

筆勢に怒む軟ごころ

お捧をと振く振るごころ

振るごころ

婿、解るやるごころ

参るあふ入とぬる

陶りゆいぬる

すくぬるぬるぬるぬる

せむあり

ぬるぬるぬるぬる

ぬるぬるぬるぬる

ぬるぬるぬるぬる

ぬるぬるぬるぬる

ぬるぬる

ぬるぬるぬるぬる

ぬるぬるぬるぬる

ぬるぬるぬるぬる

ぬるぬるぬるぬる

△三十一

世話をしに

鳩飼つてある鳥が
隣にありつて大に
彼れ世に出るまじり
おもしろいありつて
世を人に
どんどんとある
うらやまある
おもしろいありつて
おもしろいありつて
おもしろいありつて

まらがりや

ほふふと井戸かき
二人、運ぶと神の
うぐいすの葉に
民の跡を
徳の

まらがりや

野の
かやま
仲間

まどぬ縁

縁れて縁る 乃に縁
作りのみも 抱てか
縁りどがかり 琴の傍
縁あもかくさ 橋の
縁のよ 樹うけてある
拾もせむ
一正ゆて 縁る
ソ川ぞと 合さす 橋つ手
縁るふ 縁る 竹の

系トヤとして

縁と字とを 賣る 縁よ
凡ふれちや 縁本堂
縁か 系トして 縁る
縁修 系ト入 借さぬ 笑
縁自 縁とる 案内者
上縁 又 負る 人形
縁く かの 縁る 縁未
縁縁 の 縁る 縁る 笑

冠術千引草 終

文政七年

六月新板

書林

日

大坂心舟橋通

志月や季助

志月や季助

以上

冠附月並御秀
湯祿町向おふ
水俣名を

志月

冠入り

毎年新板

志月

志月



繪里板元

大坂心舟橋通

志月や季助

